様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月２１日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２０１０～２０１１
課題番号：２２７２０１４２
研究課題名（和文）　明代戯曲テキストの受容に関する基礎的研究

研究課題名（英文）　Fundamental study about acceptance of the Ming period drama text

研究代表者
土屋　育子（TSUCHIYA　IKUKO）
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号：３０４３７８００

研究成果の概要（和文）：明代は、戯曲テキストが多く刊行され、様々な作品が現れ発展した時代であった。これは中国演劇が具体的な姿を現した元代の後を承け、当時生じた出版業の勃興や社会構造の変化と関わってもたらされたものであった。本研究は、このような時代を背景とした明代の戯曲テキストを主たる研究対象として、テキストの比較・分析を行うと同時に、出版業の動きや当時の意識等を考慮しつつ、元明清にわたる中国演劇の発展・展開を明らかにしようとするものである。

研究成果の概要（英文）：Ming period was a time when many drama texts were published, and various works appeared and developed. The Chinese traditional drama can know the concrete figure for the first time in Yuan period. To Ming period, a lot of dramatic publications were published by a change of a sudden rise and the social structure of the publishing business. This study is main by a drama published in Ming period to assume such times a background; study it. I perform a comparison, the analysis of the text and, in consideration of movement of the publishing business or then consciousness, am going to clarify development, development of the drama in "元明清" in China.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1100,000	330,000	1430,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：各国論・各国文学
キーワード：中国文学、中国戯曲、西廂記、琵琶記

１．研究開始当初の背景

明代は庶民文学が栄えたと言われる。この時期の作品としては特に『三国志演義』や『水滸伝』等の小説に目が向けられがちだが、戯曲も大いに発展した時代であった。しかしながら、近年、小説研究が日進月歩の勢いで進む一方で、戯曲研究はまだまだ少なく十分とは言えない状況にある。

明代に先立つ元代の演劇――雑劇については、多くの研究が進められている。特に現存最古の戯曲テキストである元刊雑劇三十種に関しては、申請者も参加している全訳校注、『元刊雑劇の研究―三奪槊・気英布・西蜀夢・単刀会』(赤松ほか共著、汲古書院 2007)が出版され、その他の演目についても今後引き続き発表される予定である。また、電子テキストも早くから台湾中央研究院のホームページで公開されている。

このように、元雑劇については徐々に研究も進み、環境も整いつつあると言えるが、明代の戯曲に関しては、不十分な状態に留まっていると言わざるを得ない。その理由として一つには、明代には出版業の勃興により出版量がそれ以前の時代に比べて爆発的に増大し、その結果として戯曲関連の出版物も現存する量が多く、整理が容易ではないということが挙げられるであろう。

最初期の研究では作品分析を行うものが主であったが、先に述べた出版量の増大によって出現した複数の戯曲テキストに対して、現地調査と関連づけて系統分けを試みたのが、田仲一成博士の一連の研究（『中国祭祀演劇研究』東京大学出版会 1981 など）であり、そこで画期的な成果を挙げておられる。ただし、博士の研究は、伝統演劇の分化モデルを提示するものであり、個々の作品についての検討・精査はこれからの課題として残されている。

申請者は、こうした状況を踏まえ、これまで次の研究をおこなってきた。元刊雑劇については、「元雑劇の明代以降における継承について」(『日本中国学会報』５６）において、元刊の雑劇作品が明代以降には雑劇とは系統の異なる南方の演劇――南曲（伝奇・南戯）に、内容面だけではなく、曲辞の面からも直積的な継承が行われている状況を、具体例を挙げつつ論じた。

そして、明代後期に大流行した地方劇である弋陽腔（よくようこう）のテキストにも着目し、「弋陽腔系散齣集の書誌について」(『汲古』第４６号）で、弋陽腔系の戯曲テキストに関する書誌を整理した。それを基盤として、個別の作品に関する研究も行い、『西廂記』については、「弘治本西廂記について」（『中国文学報』６８）、『琵琶記』については、「『琵琶記』テキストの明代における変遷―弋陽腔系テキストを中心に―」(『研究論文集―教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集―』Vol.3 no.1）を発表してきた。『白兎記』についての「戯曲テキストの読み物化に関する一考察―汲古閣本『白兎記』を中心として」（『日本中国学会報』５８）では、戯曲テキストの読み物化という問題を特に論じた。さらに、「「浄」考――中国古典演劇の悪役について」では、版本研究にとどまらず、中国伝統劇がもつ特徴について悪役のありようから論じた。

申請者は過去の業績を踏まえつつ、今回の申請で、さらに明代戯曲のテキストについて精密な調査を行い、これまでの研究と結びつけて、明代の戯曲テキストに関する研究を進めたいと考えている。また、これまでの研究では主に日本・中国に蔵されるテキストを対象としてきたが、それは主として影印本を利用したものであったので、実際に原本を調査する必要がある。また、近年刊行された『韓国所蔵中国漢籍総目』(学古房 2005）によれば、韓国にも複数の戯曲テキストの所蔵が確認でき、詳細な調査はいまだ行われていないことから、韓国所蔵テキストの調査も不可欠である。本研究は、こうしたテキスト研究に加え、戯曲と当時の社会との関わりについても研究を行い、総合的な研究として行うものである。

２．研究の目的

本研究は、明代の戯曲テキストについて、資料収集及びテキストの実地調査を行うとともに、精密な校勘と内容の比較対照を行うことによりテキストを系統付け、テキストの性格及び継承関係を明らかにすることを目的とする。さらには、戯曲テキストの研究を通して、明代当時の出版業者の動きや、実演と出版業者または出版物との関係などから、明代社会のありようや、明代における戯曲の位置についても考察し、単なるテキスト比較にとどまらない多面的な研究を行おうとするものである。

３．研究の方法

初年度は、明代戯曲のテキスト収集と調査を進め、これまで収集してきた資料と合わせて、文言や内容の精密な比較・検討を行い、その結果に基づきテキストを系統付ける。特に、いまだ成果を公表していない作品についても調査に着手するとともに、これまでに論文として公表している『琵琶記』や雑劇の明代における継承問題についても、さらなる研究を深める。

2 年目は、引き続き資料の収集・調査等を進め、初年度に十分に行えなかった調査があった場合は、2 年目にも継続して行う。

2 年目は、引き続きテキスト収集と調査等を進め、初年度に十分に行えなかった調査があった場合には、2 年目にも継続して行う。2 年目には、文人による作品及び南曲の代表的作品について調査を進めるとともに、これまでに公表している『西廂記』『白兎記』についてもさらに研究を深め、前年度の研究をさらに発展させる。最後に、2 年間の成果を報告書としてまとめる。

４．研究成果

研究の主な成果

今回の研究機関に得られた成果は、主として次の３点に大別出来る。

(1) 明代戯曲テキストに関する研究

本研究期間、国外は中国・国家図書館、韓国・国立図書館など、国内は東京・国立公文書館、京都大学文学研究科図書館などに赴き、調査及び資料収集を行い、さらに比較・検討を進めた。

明代に刊行された戯曲テキストのうち、一幕物の演目を集めた散齣集という戯曲集について、基本作業として重要な演目の整理・分類を行い、一覧表を作成し、これにより明らかとなった演目の特徴、収録状況の偏在などを論じた論文を公表した。

また、これまで行ってきた調査・検討の結果を、学術図書として出版する予定である。

明代戯曲に関連して、戯曲と関わりの深い明代文人の王世貞とその周辺の人々に関する研究も平行して進め、発表も行った。この分野の研究は、これまで十分になされておらず、今後さらに深めていく余地がある。今後この方面の研究を進め、明代文人の書簡の訳注も公表していく予定である。

(2)元代雑劇に関する研究

中国演劇史において、具体的な姿を知ることのできる最も古いものは元代の雑劇である。これは、現存最古の脚本、通称『元刊雑劇三十種』と呼ばれるテキスト群の存在があるからである。これは、明代の前段階として、演劇の原始的形態や、その後に与えた影響を考える上でも、大変貴重な資料である。申請者は、他大学の研究者とともに元刊雑劇の研究を進めており、本研究課題の関連内容として研究成果をまとめ（『元刊雑劇三十種』のうち、「貶夜郎」と「介子推」）、共著書として公表した。今後もこの研究を継続し、成果

を順次公表していく予定である。

(3)清代から民国期における戯曲及び口承文芸に関する研究

明代の後を承けた清代には、弋陽腔系統の地方劇と、崑山腔系統の地方劇とが二大潮流となる。さらに、清代中期には京劇が成立する。こうした状況の中、当時はパンフレットのような薄い冊子体で、芝居の脚本や小唄の歌詞などが大量に流通していた。この冊子は唱本などと呼ばれ、当時の京劇や口承文芸の姿を伝える貴重な資料である。本研究課題の発展的研究として、他の研究者と共同で訳注２篇を作成し公表した。演目には複数のテキストの存在が確認できるものもあり、今後それらを比較・検討することにより、さらなる研究の深化が期待できるところである。

また、これと関連して、20 世紀前半に活躍した京劇役者である梅蘭芳の自伝の訳注作業も進め、三回分を公表した。清代後期から中華民国にかけて、京劇が中国全土を席巻したが、梅蘭芳はその時期の立役者の一人である。彼の自伝には、清代末期の京劇の実態や役者の様子、また彼自身がどのように演目に取り組んだかといったことが記されており、当時の状況を知る資料となりうる。今後も訳注作業を進め、公表していく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①土屋育子、明清刊散齣集の収録演目に見られる特徴について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、査読無、vol.16、No.2、2012、190-178

②赤松紀彦・金文京・小松謙・佐藤晴彦・荀春生・高橋繁樹・高橋文治・竹内誠・土屋育子・松浦恆雄、元刊雑劇の研究（八）「火焼介子推」第三・四折全訳校注、京都外国語大学　研究論叢、査読無、Vol.75、2010、27-50

〔学会発表〕（計１件）

①土屋育子、明代文人の交友～王世貞と李攀龍の書簡を中心に～、九州大学中国文学会第258 回中国文藝座談会、2012

〔図書〕（計１件）

①赤松紀彦、金文京、小松謙、佐藤晴彦、荀春生、高橋繁樹、高橋文治、竹内誠、土屋育子、松浦恆雄著『元刊雑劇の研究―貶夜郎・介子推―』汲古書院、2011、280

〔その他〕（計５件）

翻訳

①戚世雋・土屋育子・中里見敬、濱文庫所蔵唱本『美女五更思春』訳注、言語文化論究、査読無、2012、336-323

②戚世雋・土屋育子・中里見敬、濱文庫所蔵唱本『改良文明棍新編』訳注、査読無、2012、31-50

③土屋育子・顧靖宇、梅蘭芳『舞台生活四十年』訳注（四）、佐賀大学文化教育学部研究論文集、査読無、Vol. 15、No.2、2011、113-127

④土屋育子・顧靖宇、梅蘭芳『舞台生活四十年』訳注（五）、佐賀大学文化教育学部研究論文集、査読無、Vol. 16、No.1、2011、61-86

⑤土屋育子・井上智恵・柏雲瀚・姚遠、梅蘭芳『舞台生活四十年』訳注（三）、佐賀大学文化教育学部研究論文集、査読無、Vol.15、No.1、2010、69-88

６．研究組織

(1)研究代表者

土屋　育子（TSUCHIYA　IKUKO）
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号：30437800